

調査報告

トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一二)

―聖堂装飾(レリーフ、フレスコ)を中心に

田 中 咲 子

キーワード

リユキア、トロス、ビザンチン美術、キリスト教、聖堂装飾

聖堂の身廊と南側廊(南翼廊を除く)の発掘を中心とした二〇一二年夏の調査における出土物のうち、本稿では何らかの意匠を伴い聖堂の装飾に寄与していたと思われる遺物、すなわちレリーフ、パネル、柱頭、リントルあるいはエピステュリオンと考えられる石材のレリーフ、そしてフレスコについて報告する。本年の調査概要、並びに本稿で扱う装飾的部材の本来の用途については浦野／深津報告で触れられているため、ここでは必要最低限を述べるにとどめ、部材そのものに関する所見と目録の提示を本稿の主たる目的とする。

今回発見された浮彫り装飾を伴う石材は、パネルが六

点、柱頭が一点、リントルあるいはエピステュリオンが九点乃至一点である。パネルの出土数は前年の調査よりも少なく、さらに表されている意匠にも大きな違いがみられる。すなわち、前回多数出土したアーチに囲まれた十字架のモチーフが、今回は一点も発見されなかった。その一方、これまでに出土した中で最も大規模且つ複雑な意匠を示すパネルが二点出土した(⑤、⑥)。どちらも大きな石板のほぼ全面を使って総合的に構成されており、本聖堂のこれまでの出土物の中でも美術史的に重要な遺物に数えられる。また、今回は初めてビザンツ柱頭が複数出土した。リントルあるいはエピステュリオン(アーキ

トレーヴ)も同様に前回は例がなく、今回の調査で初めて確認された遺物である。その他、透かし彫りや、テンプロンもしくはソレアといった障壁の支柱の一部と思われる断片も多数出土した。しかしながら、いずれも激しく損傷して本来の意匠を全くとどめない小片であるため、今回の中間報告では割愛する。フレスコは聖堂壁面においてはベーマを囲む壁面で四カ所、南側廊内壁で一カ所確認された。また、フレスコが付着した石材が数点出土した。

以下、スラブ、柱頭、リントルあるいはエピステュリオン、そしてフレスコの順にそれぞれ概要を記す。

カタログ

1. 浮彫りパネル

浮彫りを伴うパネルとしては六点のパネルの存在を確認することができた。複数の断片を接合しても完全な形に復元できるものではなく、いずれも一部のみをとどめた断片である。⑤と⑥以外はそれぞれ独立した文様をもち、互いに強い関連性はないようにみえる。それゆえ総括的に述べることが困難であるため、また、他の石材と比べてパネルの場合は図像が大きく表されることが多く、各図像が重要な意味を担っていることが考えられるため、一点ずつ所見を記したい。

① 24 - 24 b (- 24 a)
縦…七六 cm、横…三八 cm、厚さ…一〇 cm (寸法は 24、24 b のもの)

鋭角をもつ石版の一部をなす断片の鋭角部分をとどめたものである。当初 24 番と 24 a 番、24 b 番の三点を接合できることを確認したが、計測は 24 a を除く二点で行っている。石版の輪郭に沿うように線が彫られているのが確認できる。裏面に意匠は認められない。鋭角の角をもつことから、アンボの階段の手摺りをなす石版の頂点にあたる部分と考えられるが、現存する二辺のうちどちらが斜辺であったかは現段階では定かではない。



図 1. 24-24b



図 2. 上 24c、下 番号不明

② 24 c
縦…四六・五 cm、横…四四・五 cm、厚さ…一〇 cm
表のみレリーフを有する石板断片である。十字架の右腕と下腕をほぼとどめており、各腕の先端には玉状の裝飾が伴う。また、十字架の右側にはおそらく杵取りと思われる線が彫られている。二〇一一年夏の調査では同様の十字架を刻んだパネルが北側廊と北翼廊から数点出土した。それに対して身廊とベーマ、そして南側廊を対象とした本年の調査では、同じタイプの十字架のパネルは本断片しか発見されなかった。昨年度に出土した十字架のモチーフと比べ、本作では細部が省かれて簡素である。

尚、本断片の付近からよく似た十字架の腕の一つを示す断片が出土した（番号不明）。同一のパネルに由来する、おそらく十字架の左腕に相当する断片であった可能性がある。



図 3. 69

③ 25（浦野報告写真 9・3 参照）
縦…八四 cm、横…八二 cm、厚さ…一〇 cm
円に内接する六弁からなるロゼッタ文を配した石板であり、ロゼッタ文の三辺を囲むように浮彫りと沈み彫りで線が刻まれている。斜辺をもつことから、アンボに使われたパネルである可能性が高い。①の斜辺の傾斜とほぼ一致するが、本来同一の石板であったかは現段階では確認できない。裏面には意匠が認められない。

④ 69
縦…三〇 cm、横…五七 cm、厚さ…一〇・五 cm
石板の端をとどめた断片である。幅の広い杵取り線の内側に、葉もしくは羽根状の意匠が確認できる。現段階では本断片の本来の向きは不明である。裏面には断片の長辺に沿って刳型裝飾が施されている。

⑤ 68・72・72 a・72 b・72 c・84・84 a・146 (浦野報告写真17・1参照)

縦・八四・〇 cm、横・九五・〇 cm、厚さ・六 cm

両面に浮彫りが施されたパネルの一部であり、現段階では計八点の断片から成る。一方の面には円と十字架、蔦文からなる文様が(A面)、もう一方の面には円と矩形、菱形で分割された空間に鳥獣モチーフやロゼッタ文が配されている(B面)。A面において円を中心として左右対称に十字架を配した画像を復元すると、当初は現存のパネル幅の約一・五倍にあたる幅一三〇 cm近い石板であったことが推察される。他方、B面では鳥獣を配した大円を中心に左右ほぼ対称の画像が表されていたと考えられ、画像を粹取る右辺に対応する線の一部が大円の左側にも見出せることから、現在のパネル幅に画像全体がほぼ収まっていたことが窺える。つまり当初の画像の幅がA面とB面では異なることになる。A面に対してB面の画像が逆さであることも考え合わせると、本パネルが再利用された可能性が浮上する。

本パネルA面の十字架と後述⑥A面の十字架はほぼ完全に一致するプロポーションを示すが、これらのように腕が細い十字架は、ビザンチン世界に広く見出せるものの、本聖堂で発見されたのは今回が初めてである。両パネルはお

そらく対であったと考えられる。同様の作例は⑤、⑥以外に確認されていない。

⑥ 110・110 a (浦野報告写真17・4参照)

縦・五五・五 cm、横・六六・五 cm、厚さ・六 cm

前掲⑤と同様、本石板も両面に浮彫りが施されており、一方に円と十字架からなる文様が(A面)、他方に鳥獣や蔦文が配されている。本作A面の十字架のサイズ、意匠とも⑤のA面の十字架と一致する。また、円の中心から石板右辺までの長さを二倍すると一三〇 cm前後になり、⑤のA面とほぼ対称であることがわかる。他方、B面、鳥獣が配された矩形と同寸法の矩形を鳥獣文の右に配すとすると、石板の幅が約一〇〇 cmあれば画像全体が収まる計算になり、⑤B面の幅と一致する。それゆえ、本パネルのA面、B面ともそれぞれ⑤と対をなしていたことが想定される。尚、本パネルのA、B面の画像の上下は一致している。

2. 柱頭

本聖堂の創建時、もしくはそれ以降に作られたと思われる柱頭、いわゆるビザンツ柱頭が九点、ローマ時代に由来すると思われるものが五点、計一三点の浮彫り付柱頭が見された。

ビザンツ柱頭は、組紐文で構成された十字架を配した29番を除くと、いずれも花文や渦巻き、十字架などの文様を内包する大円が植物の葉、もしくは双方を意匠とする。そのうち63と145、145 a、145 b 番には四面全てに大円と植物の葉が刻まれており、柱頭全体の外形の点でも文様の処理の点でもバランスがとれている。両者の意匠はよく似ているが、63番は145、145 a、145 b 番よりも一〇cmほど丈が低い。また、129番は一部分のみを残す断片であるが、大円と植物文が145、145 a、145 b 番とほぼ同じであり、同一の彫刻家の手によることが考えられる。

これら三点に対して58、62番は外形の歪みが著しく、どちらにも全く浮彫りを施さない面がある。58番においては無意匠面の反対側、すなわち正面こそ全体にわたって意匠が施されているが、その両脇の面は正面側半分のみである。壁などで視界が遮られる場所に設置されることを見越して、背面の浮彫りを省略したのかもしれない。

60、60 a 番からなる柱頭は棕櫚の葉のような細い葉が四

隅から生い茂り表面を覆い尽くすかのような意匠である。

組紐文による十字架を配した29番は、上辺が二五cmほどであり、四〇cm以上に及ぶような他の柱頭と比して際立って小型である。現存する二面には、ほぼ同様に組紐文で構成された十字架が表されている。同様の組紐文による十字架を配した柱頭は、ウシヤク博物館にも保管されている。

今回の調査ではローマ時代と思われるコリントス式柱頭が計三点出土した。いずれも非常に似通った意匠が認められる。また、一点のみイオニア式の柱頭(56番)が出土した。フルーティングと卵鑢文を施した石材(41番)はおそらくローマ時代に由来し、本聖堂では柱頭として再利用された可能性がある。

石材番号	高さ	幅	奥行き	図
17	56	80	80	4
29	27	25	19	5
41	39	上辺 38 下辺 34	上辺 38 下辺 34	浦野報告 写真 13-4
56	29	60	46	6
58	51	上辺 41 下辺 36	上辺 42 下辺 36.5	7
60	36	38	41	8
60a	20.5	42	42	
62	48	上辺 41.5 下辺 44	上辺 40 下辺 41.5	9
63	41	上辺 44 下辺 36	上辺 44 下辺 37	10
85	26	39	61	11
129	33	25	20	12
145-145a-145b	52.5	上辺 44 下辺 34	上辺 44.3 下辺 34	13
155	72	65	48	14
159	73	63	x	15

表 1. 出土柱頭一覧（2012）



图 4.17



图 5.29



图 6.56

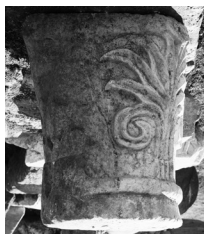


图 7.58

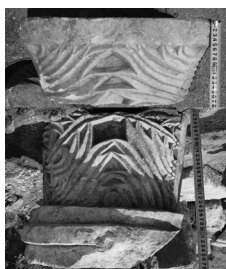


图 8.60-60a



图 9.62



図 10. 63



図 11. 85



図 12. 129



図 13. 145-145a-145b



図 14. 155



図 15. 159

石材番号	高さ	長さ(幅)	奥行き	図
27	27	22	18	16
39	23	44	34	17
42	22	77	上面 34 下面 50	
40	19	47	44	18
43	26	78	41	19
44	-	-	-	
55	21	112	50	21
70	-	-	-	23
74	112	45	25	20
80	21	114	44	24
80a	21	50	上面 45 下面 39.5	21 上、中
81	19	36	48	21 下
97	20.5	89	53	25

表2. 出土エピステュリオンまたはリンテル一覧(2012)

3. リンテルあるいはエピステュリオン

リンテルもしくはエピステュリオンの部材と思われる石板は計九点乃至一二点が出土した。いずれも高さ(厚さ)二〇cmほどであり、その側面に連続アーチと植物の葉を基本とした文様が刻まれている。葉はおおよそ三つのタイプに大別できる。すなわち棕櫚のように細く先が尖った葉、

本来アカンサスを意匠化したものと思われるが、ナラヤトチのような鋸歯が丸い葉(葉先が渦巻き状に丸まったものもある)、そして広葉樹型の葉である。これら各タイプの配列順序は石材により異なる。また、同一タイプに属す葉であっても、石材によってプロポーションは様々である。同様に、連続アーチも二段の柱脚に乗る二重柱が用いられ

ている点では統一性があるが、柱の太さや長さ、柱脚のプロポーションはそれぞれ異なる。その中で、43・44番と74番は、意匠、様式ともに似通っている。27番もこれらとよく似ている。

出土した石板の中には、連続アーチ文と反対側の面に古代のものと思われる意匠をとどめた例がある(55、80a)。55番は反対面も連続アーチ面と同様に上へいくにつれて迫り出し、そこに連続するパルメット文を表しているようであるが、迫り出した上部が削り落とされているために文様の三分の二は失われている。80a番ではアストラガルが二列に走る。同様の意匠が81番にも認められる。しかしながら80a番のアストラガルが上下ほぼ揃っているのに対し、81番では長玉の位置が上下でずれており、両者がそもそも同一の石材に由来するとは言い切れない。いずれにせよこうしたアストラガルはイオニア式やコリント式オーダーのエピステュリオンにみられる軒蛇腹にしばしば見られるものであり、トロスでもローマ時代の浴場付近から同様の裝飾を伴うエピステュリオンが複数出土している。80aと81は、古代の建築物の石材の再利用である可能性がある。



図 16. 27



図 17. 39



図 18. 40



図 19. 43-44



図 20. 74



图 21.55



图 22. 上中 80a、下 81



图 23.70



图 24.80



图 25.97

4. フレスコ

今回の調査で確認された壁面フレスコは計四カ所であった。件数こそ前回の調査よりも少ないが、ある程度の広がりのある壁面がまとまって保存され、具体的な文様まで確認できた場所もある。南側廊壁面のフレスコがそれで、聖堂の南側に付属する小礼拝堂へ続く開口部より西側へ幅三〇〇cmほどにわたって文様が描かれているのを確認した。また、ベーマの南東角を挟んだ左右の壁面にも文様を表すフレスコ画が発見された。

意匠については、南側廊のものは幅六cmの赤い水平線を挟んで上下に幾何学的な文様を配す構成である。その上方には赤、青、黄褐色、白を用いて互いに重なり合う円が左右へ連なる文様が、下方にもやはり小さな円弧を基本とする文様が描かれている。ベーマ周辺のフレスコ画も同様に円弧と逆さアーチを基調とした文様であることが看取できる。こちらには赤、黄褐色、青緑、白が使われている。これら壁面のフレスコ画はひじょうに脆い。また、ベーマ南東角左側、すなわちアプシスの左手の壁面に残るフレスコにおいては、フレスコ面の文様を覆い隠すように更にもう一層、漆喰層が認められた。この最上層の漆喰表面に彩色は認められなかった。

これら三カ所の壁画は地面（発掘面）からせいぜい一m

ほどの高さまでであり、聖堂内壁画の中でも最下層といえる部分である。前回の発掘でアカンサスの葉ともみえる意匠が付着した小さな石片が一点、また星のような形状の描写が一点発見されたが、これまでの調査で確認されたフレスコ画に人物像はなく、ほぼ全てが抽象的な文様である。

また今回の調査では、フレスコ画の一部が付着した石材が多数出土した。そのうち石材番号109、149、150の石材（図）のフレスコはいずれも青と白の縞模様になっており、そもそも同一の図像を成していたことが推察される。また厚さ二〇cmほどの台形状をした石材135の底面には、漆喰を施さず石の表面に直に色を塗ったと思われる賦彩の痕跡と、薄く漆喰を塗布して描きたいわゆるフレスコ画が認められる。とりわけ黄色と黒については、石板表面と漆喰上との図柄と色がほぼ一致している。

（新潟大学教育学部准教授）

石材番号	フレスコ寸法		石材寸法			図
	縦	横	高さ	幅	奥行き	
/	74	219	/	/	/	26
/	35	87	/	/	/	27
/	-	-	/	/	/	28
/	-	-	/	/	/	29
109	-	-	44	70	25	31
127	-	-	12	39	24	30
135	-	-	21	98	63	34
149	-	-	24	37	20	33
150	20	46.5	26	63	50	32

表 3. 出土フレスコ一覧（2012）



図 26. 南側廊フレスコ



図 27. ベーマ南東壁



図 28. ベーマ南東壁



図 29. ベーマ南東壁

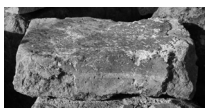


図 30. 127



図 31. 109



図 32. 150



図 33. 149



図 34. 135

Ausgrabungsbericht: Bischofskirche zu Tlos, Lykien 2012 – Reliefs und Freske

TANAKA, Emiko

Von dem Ergebnis aus der Ausgrabung 2012 handelt es sich bei diesem Bericht um die Funde, die zur Verzierung der Architektur nützten, nämlich die reliefierten Steinplatten, Kapitelle, Architrave und Freske. Der Überblick der gesamten Ausgrabungsergebnisse sowie die Verwendung der hier erwähnten Reliefstücke werden hauptsächlich im Bericht von Urano/ Fukatsu im selben Heft behandelt.

In diesem Ausgrabungssaison wurden insgesamt sechs Steinplatten, dreizehn Kapitelle, zehn Architrave gefunden. Außerdem wurde Fresko bei den vier Stellen entdeckt. Die Fotos der meisten Funde sind hier gezeigt, aber es fehlt an einigen Fotos, die im Bericht von Urano/ Fukatsu abgebildet sind.